

LEVEL

4

かぐや姫



かぐや姫

ひめ

むかしむかし、山の近くの小さな村に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは毎日、山で竹を取ってきて竹かごやざるを作り、

売ったお金で暮らしていました。



村の人は、おじいさんのことを竹取りじいさんと呼んでいました。

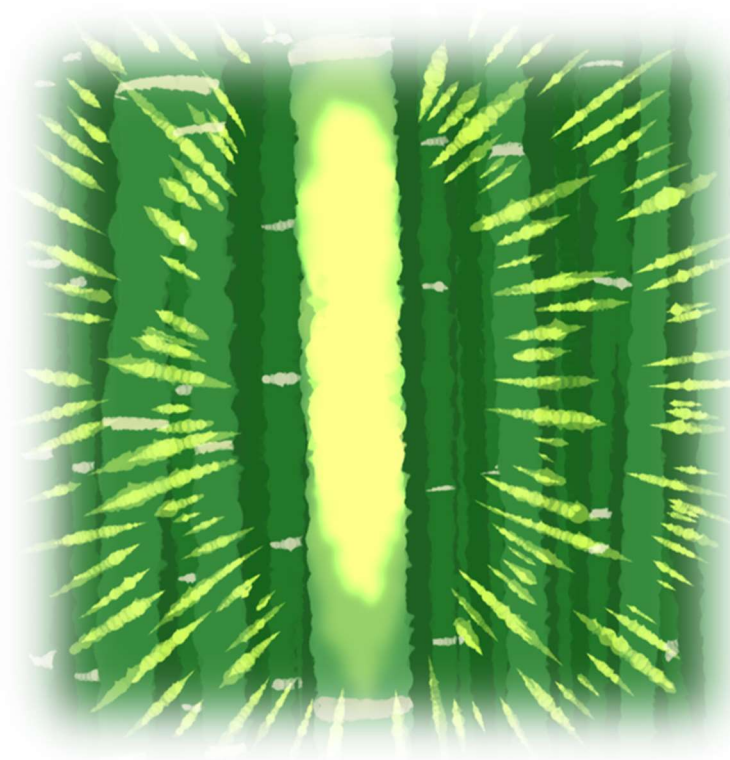
ある日のこと、竹取りじいさんが竹林に入っていく

と、どこからか明るい光がさしてきました。光の方へ

行ってみると一本の竹が金色に輝いています。

不思議に思ったおじいさんが、早速その竹を切って

みると竹の中からまぶしい光がさしてきました。



そして、その光の中に何かがキラキラと輝いています。

そこには小さな小さな、かわいい女の子が座っていました。

おじいさんは、こわれものを扱うように、そうっと、その女の子を抱きあげると、

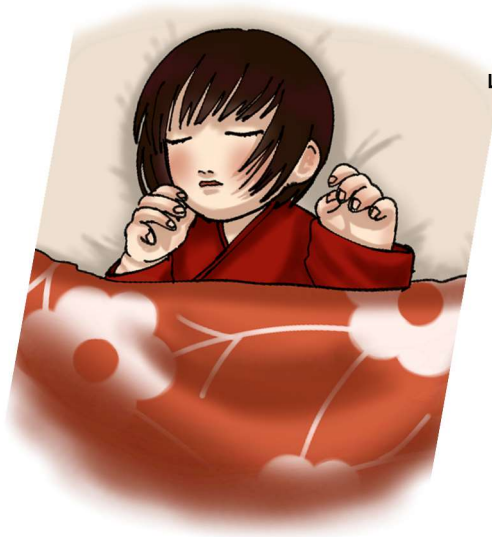
おばあさんが待っている家へと帰って行きました。



「おお、何てかわいらしい子こでしょう。」

「子どもの無い私わたしたちに、きっと神さまが、くださったのですね。」

女の子おんなこは、にこにここと二人ふたりを見あげます。



おじいさんとおばあさんは、その子こに「かぐや姫ひめ」と名前なまえをつけてかわいがりました。

楽しそうに遊びまわるかぐや姫。

おじいさんとおばあさんは、そんなかぐや姫

を見ると本当にうれしくて、この子のためなら

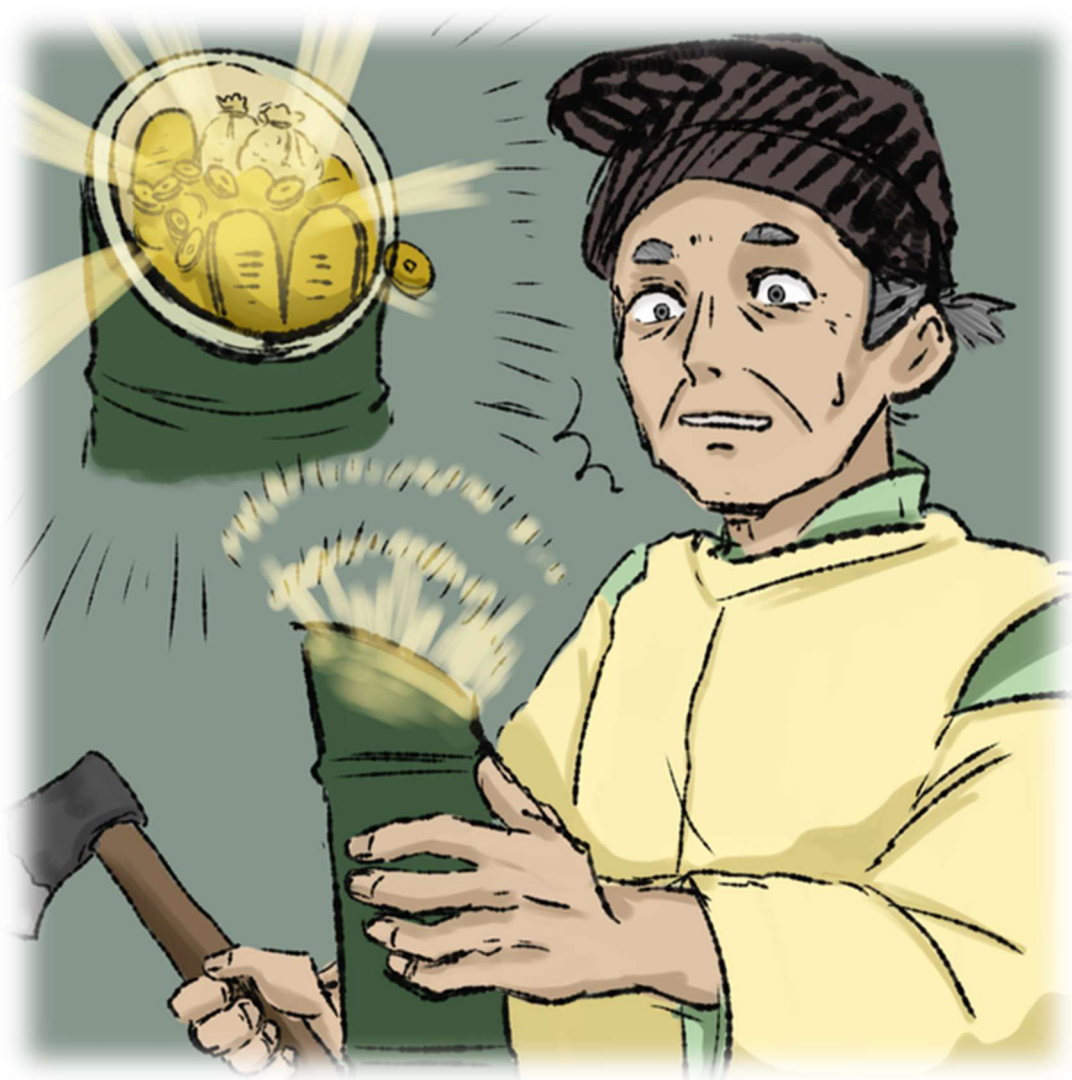
何でもしてあげようと思いました。

竹から生まれたかぐや姫。

かぐや姫を育て始めてから、おじいさんは毎日のように、金色に輝く竹を見つけました。



切^きってみると、中^{なか}にはお金^{かね}がたくさん入^{はい}っていました。



おかげで、おじいさんとおばあさんの家はとてもお金持ちになりました。

そして不思議なことに、あんなに小さかったかぐや姫は、わずか三か月のあいだに、とても

美しい娘に成長しました。

その輝くような美しさに、見た人は思わず

うっとりで見とれてしまいました。



美しいかぐや姫のうわさは、またたく間に、あちらこちらに広まりました。

そして国中から、大金持ちや身分の高い人々が、かぐや姫に結婚を申し込みに

やって来ました。家の前には、贈りものを持った男たちの行列ができました。





男^{おとこ}たちは何^{なん}とかして美^{うつく}しいかぐや姫^{ひめ}をお嫁^{よめ}さんにしよ^{おも}うと思^{おも}い、高価^{こうか}な贈^{おく}り物^{もの}を
持^もってや^きって来^きました。

けれど、かぐや姫^{ひめ}は、ま^{よろこ}ったく喜^こんでは^いません。

「あなたのように美しい娘なら、どんな人とも結婚できるのだからなあ。」

おじいさんがそう言っても首を左右に振るのです。

「私はお嫁にはまいません。」

ずっと長くお二人のそばにいたいのです。」

そこで、おじいさんは考えました。

翌日、かぐや姫に会いにやって来た男たちに言いました。



「つぎ次の品物しなものを持って来こられた方かたに姫ひめと結婚けっこんすることを許ゆるしましょう。」

あなたは、光ひかる実みのなる金色こんじきの枝えだ。

それから、あなたは金きんの毛皮けがわ。

あなたは、光ひかりをはなつ扇おうちぎ。

そして次つぎは竜りゅうの目玉めだまの首飾くびかざりり。

やみ夜よを明あかるくする色紙いろがみ。」



おじいさんが言った品物は、どれもこの世の中では見つけるのが無理な物ばかりです。

「これで、あきらめるだろう。」

と、おじいさんは考えたのです。

ところが何と、男たちは注文の品を持ってきたのです。

どれもこれも、素晴らしい宝物ばかり。

ところが、かぐや姫はだまって首を横に振りました。

かぐや姫ひめには男おとこたちの嘘うそがわかったのです。

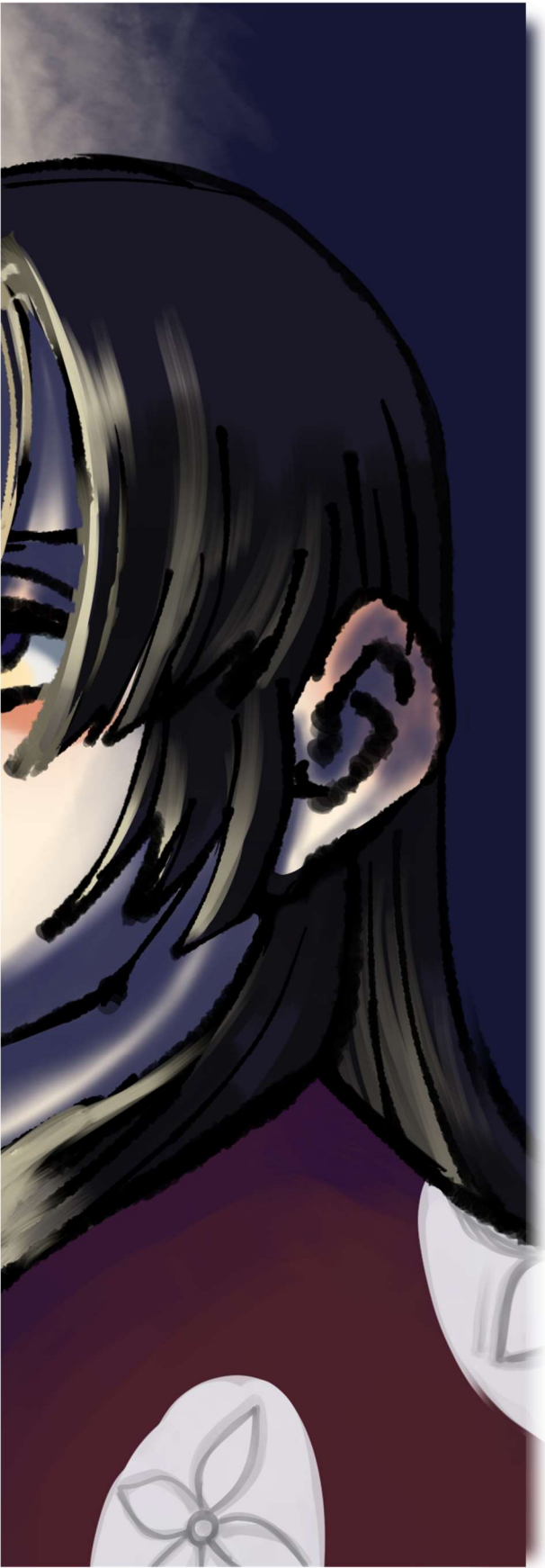
宝たからは全部ぜんぶにせものでした。男おとこたちは、がっかりして、帰かえっていきました。

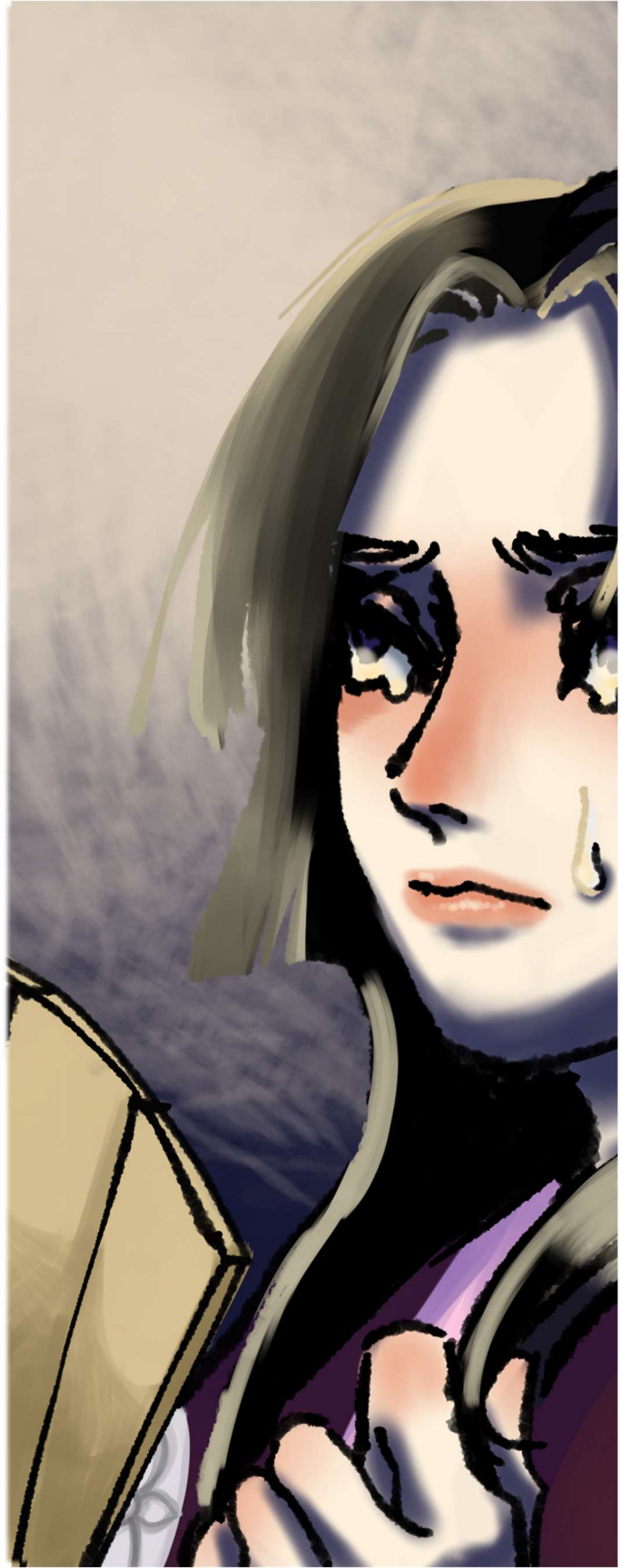


やがて月が輝いて、十五夜が近づいてきました。

かぐや姫の目に、悲しみの影が見えてきました。それに少しずつ輝いてくる月と同じよう

に、かぐや姫も、光り輝いてきたのです。そして月を見上げて泣いています。





おじいさんとおばあさんは、そんなかぐや姫の様子を見て、とても心配しました。

「かぐや姫、どうして月を見て、そんなに悲しんでいるのですか？」

かぐや姫は、決心したように顔を上げました。

「月へ帰らなければなりません。私は月から来ました。」

「ええっ、なにっ！ いま何なんと言いったか？

月つきから来きたと言いうのか？」

「はい、月つきから来きた者ものは、おとなになると

月つきへ戻もどらなければなりませなせん。」

おじいさんは、おどろいて聞ききました。



「そ、それは、いつなんだ？」

「はい、はちがつじゅうごや八月十五夜の夜に……。」

と、ひめかぐや姫は、かな悲しそうに言いました。

「じゅうごや十五夜？ それじゃあ、あす明日の夜。よるそれは無理だ。あなたは、わたし私たちの娘なのです。」

だれにも渡すものか。」

そして、十五夜の夜。

いよいよ月の人々が、かぐや姫を連れ戻しに、やって来るのです。



おじいさんは、月つきの人ひとたちを追おい返かえすため、兵士へいしをたくさん集あつめました。

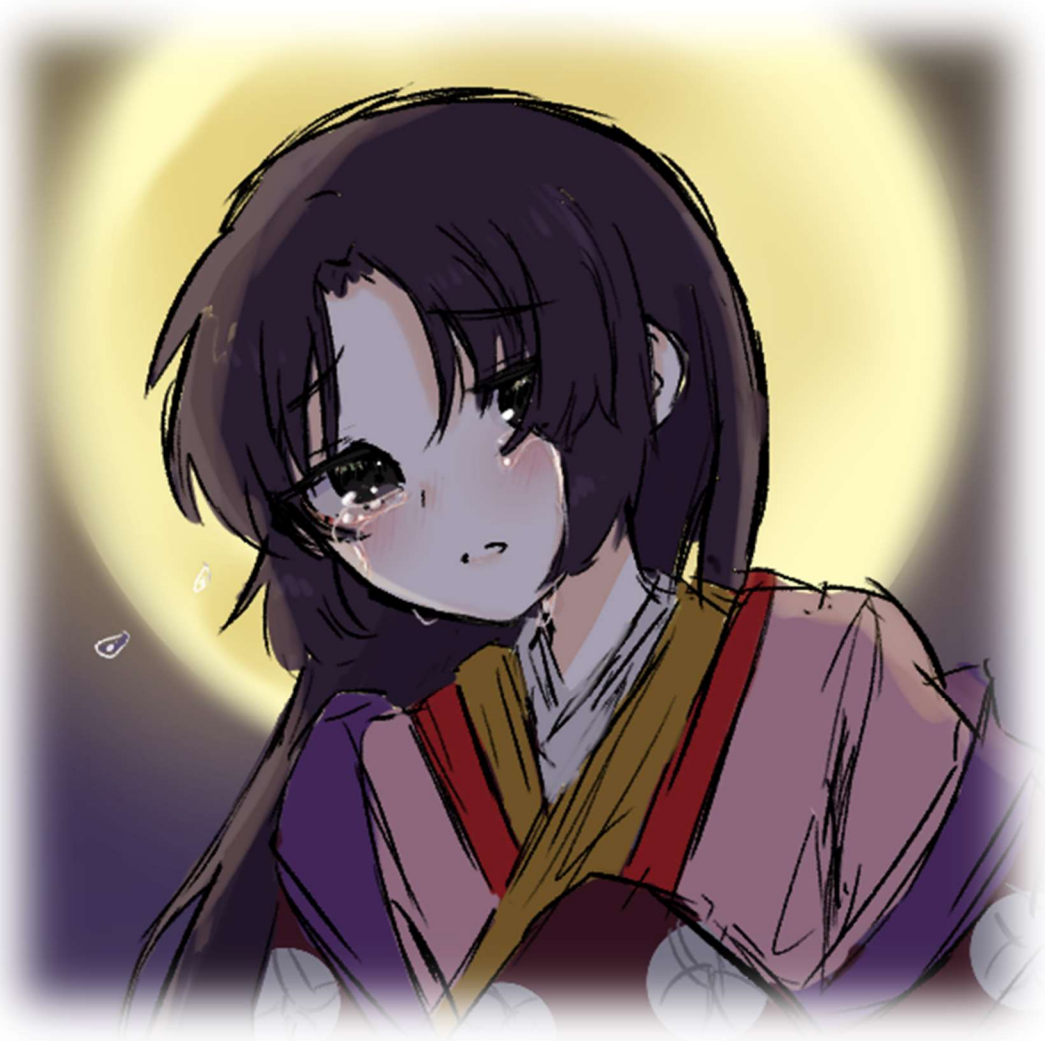
屋根やねの上うえに、ずらりと並ならぶ兵士へいしたち。

やがて、東ひがしの空そらに、十五夜じゅうごやの月つきが、輝かがやき始はじめました。

満月まんげつは、その輝かがやきの輪わを広ひろげて、まるで昼間ひるまのようです。

月の光つき ひかりに照てらされたかぐや姫ひめの顔かおは、おじいさん、おばあさんと別わかれる悲かなしみと不安ふあんでくも

り、目めは涙なみだでいっぱいでした。



大勢おおぜいの兵士へいしたちは不思議ふしぎな月つきの光ひかりに驚おどろきながらも、かぐや姫ひめを守るまもるために戦たたかう準備じゅんびをして
いました。

ヒュー。

一人ひとりの兵士へいしが月つきに向むかって矢やを放はなちましたが、矢やは月つきの光ひかりに消けされてしまいました。

それどころか、光ひかりで目めが見みえなくなつて、立たっていることができませんでした。

その不思議な光の中から、白く輝く天女と天馬があらわれました。そして、かぐや姫の前に音もなく立ちました。

「かぐや姫！ 行かないで、お願いだ！」

おじいさんとおばあさんは、祈るように引き止めました。

かぐや姫は、言いました。

「私も、ここにいたい。でも……」

「姫^{ひめ}！ かぐや姫^{ひめ}！」

「おじいさん、これを……。」

と、白^{しろ}い手^てから、一^{ひと}つの小^{ちい}さな袋^{ふくろ}を、渡^{わた}しました。

それは命^{いのち}の袋^{ふくろ}といって、いつまでも死^しなない「不^ふ老^{ろう}長^ち寿^{じゆ}の薬^{くすり}」な^なのでした。



おじいさんは必死で後を追いました。

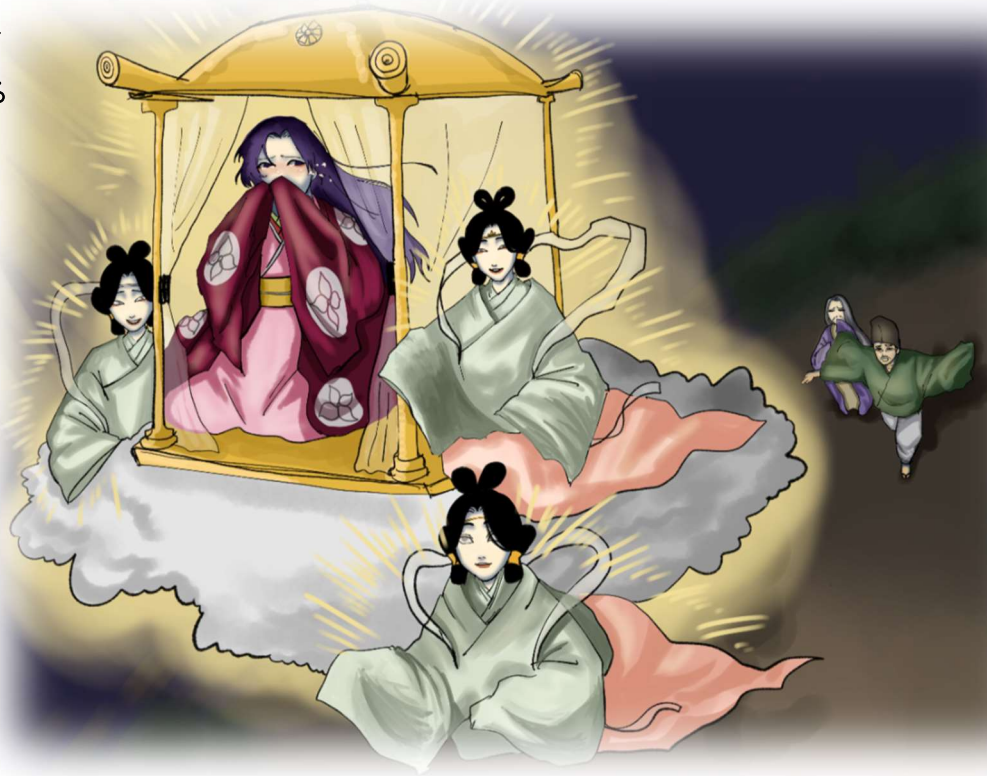
でも、天馬はどんどん遠ざかり、月の光の中へ

消えて行ってしまいました。

「か、かぐや姫、かぐや姫……。ああ……。」

おじいさんとおばあさんは、がっくりと膝をつきました。

二人のすぐ目の前に、あの命の袋がありました。



「姫よ、あなたがいないのに、長生きしてもしかたがない。」

おじいさんは、その袋を火の中に入れて燃やしてしまいました。

炎は赤々と燃え上がり、おじいさんとおばあさんの思いを乗せて

月へ向かって、高く上っていきました。

そして火の消えた後には、かぐや姫が帰って行った月だけが夜空に美しく輝いていました。

終わり





タイトル	にほんご ^{たどく} 多読の本 ^{ほん} レベル4 『かぐや姫 ^{ひめ} 』
ぶん ^{ぶん} 文	まつながゆうこ 松永侑子
イラスト	らんじゅく ^{らんじゅく} 蘭塾 (なぎ・あいこ) https://www.ashitamirai.org/
はっこう ^{はっこう} 発行	にほんごきょうしかい ^{にほんごきょうしかい} オランダ日本語教師会
せいさく ^{せいさく} び ^び 制作日	ねん ^{ねん} がつ ^{がつ} にち ^{にち} 2024年12月27日

さくひん^{さくひん} じだいはいけい^{じだいはいけい} ものがたり^{ものがたり} ふんいき^{ふんいき} こうりよ^{こうりよ} けっか^{けっか} いちぶ^{いちぶ} げんざい^{げんざい} さべつてき^{さべつてき}
作品の時代背景と物語の雰囲気^{ふんいき}を考慮^{こうりよ}した結果^{けっか}、一部^{いちぶ}、現在^{げんざい}では差別的^{さべつてき}とみなされる
ことば^{ことば} ふく^{ふく} か^かのうせい^{のうせい}
言葉^{ことば}が含まれている可能性^{かのうせい}がございますが、原作^{げんさく}の意図^{いと}を尊重^{そんちよう}し取り入れたことをご
りようしょう^{りようしょう}
了承^{りようしょう}ください。

©オランダ^{にほんごきょうしかい}日本語教師会2024

むだんてんさい^{むだんてんさい} いんよう^{いんよう} きんし^{きんし}
無断転載・引用は禁止^{きんし}します。



オランダ日本語教師会

Dutch Association of Japanese Language Teachers